

かつて法輪功が中国国営放送を 乗っ取ったことを知っているか



Interview
「ミック・アーティスト」
大雄

2002年3月のことである。中華人民共和国吉林省の省都・長春市で、市内のケーブルテレビ網の一部が切断され、放送予定だった国営放送のニュース番組が差し替えられた。流されたのは、中国の気功団体、または新

宗教団体ともされる「法輪功」の主張を収めた動画だった。中国共産党は1990年代末期ごろから、この法輪功をカルト宗教とみなし、弾圧を続けている。テレビ・ジャック事件は、つまり法輪功関係者による、それへの抗議活動だった。そしてこの事件以降、中国共産党による法輪功への弾圧は、より強まっていく。

2022年にカナダで制作された映画『長春 Eternal Spring』（ジェイソン・ロフタス監督）は、この法輪功によるテレビ・ジャック事件を、アニメーションと実写を織り交ぜながら描いた、ドキュメンタリー映画である。映画の進行役で、原画を描いたミック・アーティストの大雄氏は、事件そのものには関わっていないものの、長春で暮らしていた法輪功の学習者だった。今春、日本でその映画上映会が行われたことに合わせて来日した大雄氏に、本誌はインタビュー。独裁国家のなかで、「何かを信じて生きていくこと」の意味や困難についてたずねた。

（聞き手＝本誌編集部）

——今回は、大雄さんへのインタビューと絵画を元にした映画『長春 Eternal Spring』の日本上映会開催のため来日されたお忙しいなか、インタビューに応じていただきありがとうございます。

大雄 いいえ、どういたしまして。5月31日に、東京都内で同作のプレミア上映会を開催させていただきましたが、おかげさまで大盛況でした。今後またぜひ、日本で上映会を開く機会を得られないかと思っています。

——映画『長春』は、2002年に中国の長春市で起こった、法輪功関係者によるテレビ・ジャック事件（市内のケーブルテレビ網に細工をし、国営放送の番組に代わって法輪功の主張を流した事件）について描いた、2022年制作のカナダ映画です。大雄さんの手による絵画作品が元となっているわけですが、やはり長春で暮らしていた法輪功学習者として、大雄さんの怒りのようなものを表現されたわけでしょうか。

大雄 うーん……、その質問に簡単に答えることは難しいですね。

——そもそも私は、あのテレビ・ジャック事件それ自体には無関係です。しかし事件後、長春では法輪功関係者に対する取り締まりが非常に厳しくなって、私の日常生活

にも、さまざまな支障が出るようになったんですよ。それで私は事件後に長春を離れることになり、2008年には中国からも出て、その後はカナダやアメリカで暮らしています。

中国を出た後、2013年くらいまでかけて描いていたのが、今回の映画の元になった絵画作品群です。しかし正直なところ、事件に対していろいろ思うところはありませんよ。あの事件以後、明らかに法輪功関係者に対する締め付けは厳しくなりましたからね。そして一口に法輪功と言っても、全盛期には中国国内に数千万人規模の学習者がいたわけで、取り組み方、考え方も結構、人それぞれです。私は、法輪功の文化的側面への興味から学び始めたような人間で、はっきり言いますが、問題のテレビ・ジャック事件を目の当たりにしたその時は、困惑しました。「何てことをしてくれただ。これではまずまず法輪功への弾圧が厳しくなってしまう」とね。そして実際、私はその後、祖国である中国から離れざるをえなくなるわけですので。

つまり、直接の関与はないとはいえ、私の人生においてあのテレビ・ジャック事件は、非常に大きな影響を与えたものでした。ですから自分の作品として、絵画で表

私たちの世代でした。

そういう青少年時代を送っていたときに、私の母親が法輪功を始めたんです。母親は昔から身体が弱く、法輪功が教える気功をやれば健康になると言われて、それを習い始めたという流れでした。それで、法輪功を学ぶ母親の姿を見て、私もそれに興味を持ったんです。気功って、ようするに中国の伝統文化じゃないですか。そういう文化的側面からの関心で、私も法輪功を学ぶようになっていくんです。

——宗教的な話ではなかったと。

大雄 先ほども言ったように、法輪功に対しては、いろいろな見方、考え方を持っている人たちがいます。しかし、中国共産党による弾圧が始まる以前の段階で、「法輪功とは宗教だ」と強く思っていた人は、あまりいなかったんじゃないかと思います。多くの人は、「健康体操だろう」とくらいのとらえ方だったのではないかと。法輪功は、例えばお寺のような施設を持っているわけではありませんし、お祈りの儀式とか、そういったものもありませんから。

——しかし、中国共産党は1990年代末ごろから、「法輪功とは危険なカルト宗教である」と言って、激し

現してみることもしました。しかし、本当にあの事件に対する自分の思いには、複雑なものがありました。まず、一番悪いのは中国共産党であるということは当然だとしても、当初は「素晴らしい快挙だ！」みたいな感じに礼賛する気持ちを持っていたわけでは、決してありませんでした。

自分の頭で考えること

——そういう大雄さんのこれまでの歩み、プロフィールについて教えていただけませんか？

大雄 私は1975年に、中国の吉林省で生まれました。小さいころから絵に興味があり、特に中国の伝統文化、歴史人物の絵などを描くことが好きな子供でした。

しかし、これは私だけの問題ではないんですが、文化大革命（1966〜76年）の後の中国には、身の回りに歴史なこと、文化的なことがほとんど残っていなかったんですよ。中国の歴史が好きであっても、実際に触られる史跡であるとか、そういうものは破壊されてしまっていたりして。中国の「伝統文化」とは具体的にどういうものなのか、知りたくてもよくわからないというのが、

い弾圧を加えていくわけです。

大雄 法輪功の活動のメインは気功を学ぶことですが、それに付随して、生活上の徳目のようなことは教えていました。しかし、それにしたって単純なことですよ。「何事も自分の頭でしっかり考えて、正しい人間になりましょう」というようなものです。私も含めて、その徳目を大切にして生きている法輪功関係者は、実にたくさんいました。

しかし、こういう本来「単純なこと」ではない話ですが、中国共産党の考える政治と、かち合ってしまうんですよ。例えば何かの外交問題でアメリカと中国がめつたりすると、中国にあるアメリカ大使館などの前で、民衆たちの抗議デモが行われたりします。ただ、よく知られているように、これは官製デモです。共産党が人々に、「こういうデモをしろ」と呼びかけて、行わせるものがあるわけです。しかし、「何事も自分の頭でしっかり考えて、正しい人間になりましょう」といった価値観で動いている法輪功学習者たちが、徐々にそうした共産党の指示に、従わなくなる傾向が出てきました。私は、共産党が法輪功を危険視するようになった最大の理由は、そういう現象が発生し始めたことであつたのではなかつ

記事の前半部分のみ掲載しております。
続きは以下よりご購入ください。

<https://www.amazon.co.jp/dp/491035719X/>